

マリアの告白  
～「I LOVE 過激派」を見て～

「歳月は慈悲を生ず」

明治40年、北海道函館にて銀行支配人の子として、この世に生を受け賜った男がいた。名は亀井勝一郎。富める者として、彼は何時からか罪悪感を身にまとう。その若くてきれいな瞳をのぞいて見れば、こんな景色が映っている。

「富める者が神の国に入るのはどんなに難しいだろう。子たちよ。神の国に入るのはどんなに難しいだろう。富める者が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がまだ簡単だ。」(マルコ伝第十章)

時は経ち、現代が訪れる。「I LOVE 過激派」が目の前にあり、その作者は生きている。社会への献身性、富める者の罪悪感、宗教への憧憬、内省と激情。昔の人と、似た思いを持ちながら。

「I LOVE 過激派」を読み終わり、思い出す。

昔の人の書物を尊重する自分が求めているのは歴史うんぬんよりも、人間の生き様と魂の迸りだと。

知識を蓄えて利用するのもいいけれど、それよりも熱い情動を味わいたいと。

数え切れないくらいの反復練習に支えられた、渾身のパンチと、憂き身をやつした汗と努力の結晶でもある、全身全霊で繰り出されたキックが交差する瞬間。互いの人生を賭けたエネルギーが火花となって、なおも燃え立ち迸る。彫刻家で詩人の高村光太郎は、その迸りを「サラマンダー」火竜と言った。

二つの人生論が交錯し、お互いのリアルな人間像が浮き彫りにされる。人と人とのぶつかり合い。霧や霞をつかむような左翼理論や理屈の話ではなくて、生々しい人間の物語がある。

情事纏綿、雙田さんに始まり、雙田さんに終わるこの本は、常時観面、女と男の物語だ。

この本を見ての率直な感想。「女」。「早見慶子という女性」なくしてあり得ない物語だと思った。いたる場面でサラマンダーが火炎を吐く。

世間の表面を覆うとされる四角四面の道徳にはかすりもしない、ひどい話でもある。男泣かせに過ぎる。女も泣かせる。自分も泣く。もちろんその話の主人公は、作者である早見さんに他ならない。そしてそれ相応に殴られたり、殺され掛けたりすったもんだが豊富過ぎる。ドラマができる。

マリアの告白  
～「I LOVE 過激派」を見て～

この物語は男が女を、女が男を、無骨な換言をすれば男が早見さんを好きになるか、早見さんが男を好きになるか、まるで恋愛のような、いや、そのものの感情がこの本の基調を成している。彼らの行動原理の底流となつて、一貫している。彼らの物語の先頭を、圧倒的に陣取っている。その結末はみんながみんな・・・・・・読めばわかる。

言わなくてもいい男女の秘め事を、さながら牧師への懺悔のごとく心理の告白をつらつらと人目に見せる行為。ハートにまとった衣服をガンガン脱ぎ捨てる威勢のよさ。その赤裸々な作業に敬意を表するしかない。

だって男女の話なんて心の中に封印してしまえば、そのまま人知れず墓場に持っていける。そしたらばクリーンでイミテーションの仮面を、そのまま保てるのに。

そんなの、みんながみんなやってる常識でしょう？

この本の全編を彩る赤裸々な自己暴露が、懺悔に見える。

作者の献身性や純粋性は、その魅力に魅了され感化された、数多くの人の人生を変えた。

もしかしたら怨念を伴って「変えられた」と、思っている人もいるかもしれない。

党ではなく、人間として女性としての作者に献身した男性もたくさんいる。その実らぬ愛情に、それでも悲喜こもごもの心情を、好きな女性に捧げた男性もいたはずだ。

冒頭の亀井勝一郎は、こう言う。

峻厳に自己を抑制し内面の苦悩を圧殺することが道徳であり、そしてつねに意見が一致していなければならぬような党派的生活においては、知らず知らずのうちに己を偽ることを覚える。つねに革命的言辞を弄し、つねに勇敢であること、同志の面前に競って証明しておこうという擬態を僕は身につけていったようである。人の見ているところで、あるいは人の顔をみて、というふうに分心は動いていく。それはいうまでもなく、己の心を奥深く掘り下げて行く内面的能力の停止を伴う。精神本来の面目である単数性はここで致命傷をこうむり、「私」固有の能力というものは消滅する。これは党派の人たるための必須の条件であった。

彼もまた党派的生活を経験し、治安維持法にて獄に投じられている。

純粋性。キリストの心に感応できるほどの、献身性と純粋性の持ち主は、時に災いの創造者にもなれる。街角で籠いっばいに抱えたあめ玉を惜しみなくあげれば、喜ばれる。平等で無償のプレゼント。でも、あめ玉じゃなくて愛情ならどうだろう？愛情が分け隔てない

マリアの告白  
～「I LOVE 過激派」を見て～

のならば、それは魔性ではないのか？

自分は「純粋なら無条件でいい」とは、年を食った今では断言できない。純粋性に端<sup>たん</sup>を發して、他人への迷惑行為に直結する事だって往々にしてあるのを知っているから。

自分と「純粋な人」の大きな差異も、だいたい想像できる。

自分ならば、「他人」になるべく迷惑かけるな！そんなの大前提だろ？と即座に浮かぶ。

「純粋な人」はこうでしょう？「自己と他者の壁はない」だから迷惑なんて・・・と。

換言。一人の男を愛する最中、別の男も好きになれる。

結論。女性は怖い。で、いいですか？

これは「左翼の本」ではない。もっと大きなカテゴリーに属する、人生論の本だ。

この本は、道徳の本じゃない。けれども、それ以上に見ごたえのある人生論の本だった。

本物の魔性に懺悔<sup>ざんげ</sup>はできない。ここまで直き告白<sup>なお</sup>は、ストレートなハートに依存する。

最後に、「マリア」は絶望の真っ只中で、声を聴いた。

この世に生まれて、人間には二つのすべきことがあるのだよ。ひとつは社会に対して、どう役にたっていくのか？（どういう役割を演じるのか）ということだ。もうひとつは自分をどう成長させるか、ということなんだよ。これが最も大切なテーマなんだよ。

オマエはエリートの道を捨て、無名でありながら逮捕を覚悟し、大衆から嫌われる組織の一員になろうとした。その努力は私も知っているけどね。しかし、出世し、楽なポジションにいてその心を忘れていたようだね。そのことに今やっと気づいたんだ。大きな進歩だったね。

「マグダラのマリア」は、キリストにではなく、世間に告白をした。

願わくば世間に、自分に、その声が届きますように。